

イノベーションと人材で活路を開く

本書では、第1章で中小企業の業況が一段と悪化した2008年度の動向を振り返った後、中小企業が厳しい経営環境の下でどこに活路を見い出すか、という問題意識に基づき、第2章で中小企業のイノベーション、第3章で人材をテーマとして採り上げ、新たな製品・サービスの開発等や、中小企業で働く人材の確保・育成に関する現状と課題について分析した。本書の結びに当たり、各章のポイントを踏まえながら、我が国が現下の厳しい経済情勢を乗り越え、将来にわたる飛躍を遂げていくため、中小企業に期待される今後の取組についてまとめることとしたい。

世界的な金融危機下における中小企業の業況の悪化

第1章では、米国発の世界的な金融危機が世界経済の減速を招き、我が国も輸出の大幅な減少等により景気が急速に悪化し、雇用情勢も厳しさを増す中、中小企業の業況や資金繰り等が大幅に悪化したことを示した。こうした状況を踏まえ、政府としては、中小企業に対する30兆円規模の資金繰り対策や、売上減少のしわ寄せを受けやすい下請事業者への対策など、中小企業対策の実施に注力してきたが、我が国経済の先行きへの不透明感は強く、今後とも、中小企業の動向を十分注視していくことが必要である。

イノベーションによる市場の創造と開拓

こうした厳しい経済情勢の下、中小企業は何が求められているのであろうか。

20世紀の代表的な経済学者の一人であるシュンペーターは、1930年代の世界大恐慌を目の当たりにしながらも、新たな事業に挑戦する企業家（アントレプレナー）の役割の重要性を強調した。不況期を、既存の事業で余剰となった経営資源が新たな成長分野に移動していく契機と捉え、企業家が経営資源の新たな結合を行い、経済成長の原動力になっていくという、動態的な過程と見ることもできよう。いわば、企業家にとって、ピンチはチャンスでもある。

本書の第2章で見たとおり、我が国の中小企業は、これまでも、その創造性や機動性をいかんなく発揮し、市場が求める製品・サービスを新たに開発し、現場の知恵と絶え間ない工夫から成る中小企業らしいイノベーションを実現してきた。中小企業のイノベーションは、高度な技術開発プロジェクトに限らず、日常生活でのひらめき、現場での創意工夫、アイデアを形にする努力など、実に多様な取組の結晶である。そして、中小企業は、我が国経済が生み出す付加価値の半分を担っており、まさに我が国の活力の源泉なのである。

現在、世界経済が減速し、外需も内需も減少しており、所得や資産が減少した人々のニーズも大きく変化している可能性がある。一方で、地球温暖化問題、食の安全・安心、高齢者の増加に対応する医療・福祉サービスなど、新たな対応を求めるニーズは潜在的には大きく、かつ、増大している。アジアを始めとする新興諸国では、中長期的には人口が増加していくことから、景気変動はあるものの、需要は増大していくと見込まれる。

こうした環境の変化を的確に把握し、将来の展望を改めて描き直した上で、社会のニーズに対応した製品・サービスを開発し、供給していくため、中小企業は、経営者のリーダーシップの下、知的財産、人材、資金等の経営資源の新たな結合を図り、イノベーションの実現に向けて挑戦していくことが期待されているのである。

中小企業で働く人材の意欲と能力の向上に向けて

中小企業がイノベーションの実現に取り組んでいく上で、最も重要な課題を取って一つ挙げるとすれば、それは、中小企業で働く人材の意欲と能力の向上ではないだろうか。

第3章で見たとおり、中小企業の経営者が最も重要と考える経営資源は「人材」である。そして、中小企業は、我が国企業が提供する就業の場の7割を担っており、中小企業で働く人材が付加価値の生産を拡大させていくことが、我が国経済の活性化の鍵である。中小企業の経営者が、従業員とともに、顧客に喜びを与え、社会に貢献していく仕事に意欲的に取り組み、仕事の達成感を分かち合うとともに、仕事を通じて従業員の成長を促していくことにより、中小企業はその潜在能力を高め、それを最大限発揮させることができるようになる。それが、中小企業で働く醍醐味を更に高めるという好循環を作り出していくことになるであろう。

100年に一度の危機と言われる今、こうした取組により、中小企業の経営者と従業員が一丸となって新たな価値の創造に挑戦し、我が国経済の活路を切り開く原動力となっていくことを期待したい。

